

第17回

国際開発研究大来賞

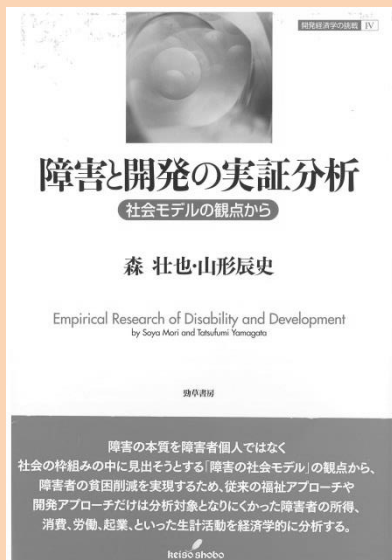
OKITA Memorial Prize for International Development Research

主催：一般財団法人 国際開発機構 (FASiD)

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第17回（2013年度）の受賞作品が下記の通り決定いたしましたのでご紹介します。

森 壮也・山形 辰史 著
『障害と開発の実証分析－社会モデルの観点から』（勁草書房）2013年



山尾 大 著
『紛争と国家建設－戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』（明石書店）2013年



これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
- 原 洋之介著『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
- 深川由起子著『韓国・先進国経済論－成熟過程のミクロ分析』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣 1999年
- 辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合－構造調整政策下における役割と育成』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著『現代アフリカと開発経済学－市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 西川 潤著『人間のための経済学－開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井孝子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 脇村孝平著『飢餓・疫病・植民地統治－開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著『図説 アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 安原 毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著『バングラデシュ 農村開発のなかの階層変動－貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著『村の暮らしと砒素汚染－バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学－ケニア・サンプルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田 りえ著『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著『現代アフリカの紛争と国家－ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著『カーストと平等性－インド社会の歴史人類学－』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著『経済大国インドネシア－21世紀の成長条件』中央公論新社 2011年

審査委員選評

本書は、「障害と開発」という問題に鋭く切り込んだ著作である。「開発学」と「障害学」という2つの領域を、「障害の社会モデル」という観点から統合的にとらえた先駆的な研究成果である。筆者たちは、障害者は「不利を被りがちな人々」の間でも、より一層不利を被りがちであることに着目し、その原因を障害の多様性と少数である点に求め、それが国際開発のテーマとして取り上げられなかった理由であると論じている。そして障害の医療・社会福祉の観点に立った個人・医療モデルを批判し、障害の社会モデルこそ有効なアプローチであると主張している。障害データの国際比較を批判的に紹介した第2章、および障害者のミクロ生計分析のサーベイをとりあつた第3章は見事なもので、「障害と開発」分野の既存データおよび研究の全体像を知る上で格好の入門である。本書の後半は、フィリピンのマニラ首都圏とバタンガス州ロザリオ市でのフィールド調査に基づいた実証分析を行った成果である。調査対象は、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害をもつ障害者である。第5章と第6章は、それぞれ障害者の所得の決定因と障害者政策の効果を計量分析の結果である。教育と所得とが相互に高めあう関係になっていること、女性障害者の所得は男性障害者の所得と比較して著しく低いこと、障害者得点制度の浸透度が低いこと、障害者当事者団体に所属していれば特典の利用頻度が高くなることが結果として得られている。手堅い実証分析で、「障害と開発」という分野では先駆的な成果である。

本書は、アマルティア・センが提唱したケイバビリティ・アプローチを具体化し、従来の貧困研究で脱落していた領域に光をあてた画期的な研究成果である。本研究成果は、英文でも出版される予定とのことであり、世界への発信を期待したい。

(法政大学教授 絵所 秀紀)

受賞者の言葉

このたび、図らずも名誉ある国際開発研究大来賞受賞の栄誉に預かり、この場をお借りして、FASIDの皆様、審査員の先生方、本書の出版にあたってお世話になったアジア経済研究所の皆様、また農村部での調査のご支援を頂きました東京大学経済学部READの先生方、さらには出版いただいた勁草書房の皆様方に、厚く御礼申し上げます。そしてこの喜びを、本書の元になったフィリピンでの障害者家計調査の共同研究相手であるPhilippine Institute for Development Studiesおよびフィリピンの障害当事者団体の皆さんと分かち合いたいと思います。

この10年余り、森は「障害と開発」という新しい分野を開発研究の中で切り拓いていくことに力を注いで参りました。1988年に初めてマルコス独裁政権が倒れたすぐ後のフィリピンで調査を始めて以来、同国の発展をつぶさに見て参りました。そうした中、森と同じような障害を持つ人たちとの出会いがあり、彼らの家に招待されるなど、フィリピンの貧しい庶民の生活を間近に見る機会がありました。2002年にフィリピンのマニラで開かれたアジア開発銀行の「障害と開発」のワークショップは、森にとって大きな転機となりました。開発専門家と障害当事者団体の代表とが一堂に会する会議でしたが、両者間でのコミュニケーションがうまくとれていない状況を目の当たりにしたのです。簡単に申しますと、開発専門家は障害のことについて、あまりよく分かっておらず、障害当事者団体は、開発のことについてよく分かっていませんでした。この両者間の橋渡しをしなければならないという使命感を強く感じたのです。開発研究者のひとりとして、開発研究の中に障害を包摂すること、そして障害を貧困削減の舞台に乗せて議論できるような土台を作ること、その2つに、それ以来取り組んでおります。

一方山形は、2000年に滞在したバングラデシュで目にした障害者の姿に動機づけられ、森から障害研究について学んで、本書の元になった研究と一緒に立ち上げました。

本研究においては、従来、障害者の割合だけが論じられることの多かった障害統計について、貧困削減という観点から、彼らの生計についての調査の必要性を訴えると共に、独自の質問票を作成し、障害者のデータを収集して、実証研究を行っております。さらに、障害学という英米で発達した新しい社会科学の力を借りて、開発の中に障害を位置づける努力をしております。本書が国際開発の賞の対象にされたことを、この努力を今後もさらに続けよ、という叱咤激励と受け止めております。ちなみに本研究の成果はフィリピン人研究者とともに英語でも出版される予定です(S. Mori, C. Reyes and T. Yamagata, *Poverty Reduction of the Disabled*, Routledge, 近刊)。

より多くの開発研究者の皆さんがこの分野に参入してくれるよう、大来賞に恥じない研究をこれからも続けて参りたく存じます。

森 壮也・山形 辰史



表彰式および記念講演会

日 時 2014年1月21日(火)14:00～16:00

【手話通訳あり】

講 演 「介入・紛争・国家建設－戦後イラクの再建をめぐるポリティクス」 山尾大氏

「障害と開発：社会モデルを用いたフィールド研究」 森 壮也氏・山形 辰史氏

※表彰式・記念講演会に続いて、受賞作品著者との懇談会を同会場で開催します。(16:00～17:00)

皆さまにご出席賜りたくご案内申し上げます。

会 場 千代田区立 日比谷図書文化館 4階 スタジオプラス(小ホール)

(千代田区日比谷公園1番4号 Tel.03-3502-3340) 地図 <http://hibiyal.jp/hibiya/access.html>

山尾 大著

『紛争と国家建設－戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』(明石書店)

審査委員選評

世界を揺るがしたイラク戦争から10年。本書は、その後、米国主導で進められたイラク再建プロセスに焦点をあて、膨大な一次資料を収集・分析し、今なお続くイラク政治の混迷の原因を考察した研究である。イラク社会で実際に何が起きたかを民主化、政党連合結成、選挙、治安回復等の切り口で克明に分析した優れた地域研究であると同時に、ガバナンス論もふまえ、近年の通説にチャレンジしている点が本書の魅力を高めている。

戦後イラクでは外部アクター(米国)により導入された民主化・地方分権化の制度が、内部アクター(宗派、部族等)のポリティクスと複雑に絡まり、社会固有の事情により形骸化していった。著者は、これこそがイラク再建が遅れた原因とみる。そして、国家機構の確立前に民主化や地方分権化を進めることの問題を提起し、ワシントン・コンセンサスの政治版ともいえるビッグバン改革に警鐘を鳴らしている。

冷戦後の内戦や地域紛争の頻発、今日の中東・北アフリカの民主化をめぐる混迷—こうした現実下において、平和構築や脆弱国家への支援は、21世紀の国際開発の重要な柱である。国家建設が外部アクターと内部アクターとの関係性のもとで進んでいくことが不可避な以上、外部から移植された制度と内部論理の各国固有の相互作用に注目した、本書の分析視角は、開発支援の実務者にとっても重い意味をもつ。

イラク再建は道半ばであり、ネーション・ビルディング過程の理論化という点では、まだ完成途上の研究と言えようが、21世紀の国際開発の重要課題に対し、日本の研究者が現時点でこうした形で問題提起をすること自体、意義あると考えた。山尾大氏には、将来を担う地域研究者として、ぜひともイラクの国家再建に寄り添って研究を続け、ネーション・ビルディングと国民統合、外部者が果たすべき役割を洞察する第二弾を世に出してほしい。こうした願いもこめて本書を選考した。

(政策研究大学院大学教授 大野 泉)

受賞者の言葉

このたびは、大来賞という大変栄誉ある賞をいただきまして、本当にありがとうございます。

審査委員の先生方、これまでご指導いただいた先生方、そしてイラクの友人たちに心からお礼を申し上げます。なかでも恩師である小杉泰先生(京都大学)、そして長らくご指導いただいている酒井啓子先生(千葉大学)のご指導がなければ、受賞はおろか、研究を続けることさえできなかったでしょう。深く感謝いたします。

私は2003年のイラク戦争後に研究を始めた世代に属します。戦後、すぐに治安が急激に悪化しましたので、私は実は2回しかイラクに入ることがありません。ですので、研究を始めたころは何年も現地調査を重ねて分厚い事実の積み上げをされている先生方の研究には強い負い目を感じ、自分の研究の価値に不安を持ち続けていました。とりわけ、私は地域研究の訓練を受けてきましたので、この問題は深刻でした。

悩んだ挙句、本当に重要なのは、長く現地に滞在することではなく、ある地域の政治や社会現象を理解するために本当に重要な「問い」を見つけることだ、と半ば開き直すことにしました。

地域の事情通になることではなく、問題をクリアに抉り出す切り口を知ること、とでも言えるでしょうか。

それ以来、意味ある「問い」を発見することを常に重視して研究を続けてきました。研究対象としての戦後イラク政治を理解するために最も重要な「問い」は何か、はじめに考えたのは、アメリカを中心に大きな流行になっていた国家建設をめぐる議論です。ただし、そこには、開発や人類学の分野ではこれまで当たり前のように重視されてきた現地の人々の視点が、紛争後の国家を再建するというマクロな切り口とうまく結びついた研究はほとんどありませんでした。何よりも、地域研究者として、戦後イラク政治を理解するうえで重要な「問い」は、アメリカという超大国による外部介入をイラク国内の政治アクターがどのように利用しているか、であると考えました。

本書では、こうした「問い」を重視し、国家建設の支援を受ける人々の利害や主体性、戦略を浮き彫りにしつつ、超大国による国家建設の政策に対峙する彼らのたくましい姿を、できるだけ多角的に描き出そうとしました。国際開発や平和構築の議論からは中途半端な記述になっているかもしれませんが、現時点ではイラク政治を理解するうえで最も適切な切り口だったと思っています。

私には今、夢中で取り組んでいる新しい研究テーマがあります。それがなるべく早く結実するように、身に余る光栄を賜りましたことを励みに、今後よりいっそう精進していきたいと思っております。本当にありがとうございました。

山尾 大



参加費 無 料

案内状 http://www.fasid.or.jp/activities/6_index_detail.shtml

申込み先 E-mail: okita@fasid.or.jp

お名前・ふりがな、ご所属、電話番号と、本案内をどちらでご覧になったかを添えてお申込み下さい。

※会場はバリアフリー仕様です。車いすをご利用の方、介助者同伴の方、盲導犬・聴導犬同伴の方は、お申込みの際にお知らせ下さい。

著者略歴

森 壮也(もり そうや)

1962年東京都生まれ。1985年早稲田大学政治経済学部卒業、1987年同大学院経済学研究科修了、1988年アジア経済研究所入所、フィリピンを担当。在ロチェスター(米国)海外派遣員(1992-1994)。2013年より、JETROアジア経済研究所開発研究センター主任調査研究員・開発スクール教授。専門は、開発経済学と手話言語学、障害学。

主要著書 『障害と開発』(アジア経済研究所、2008)、『途上国障害者の貧困削減—かれらはどう生計を営んでいるか』(国際開発学会特別賞受賞)(岩波書店、2010)、Testing the Social Model of Disability: The United Nations and Language Access for Deaf People (Burch and Kafer, eds. *Deaf and Disability Studies - Interdisciplinary Perspectives*, Gallaudet University Press, 2010)

山尾 大(やまお だい)

1981年滋賀県生まれ。2010年京都大学アジア・アフリカ地域研究科博士課程修了、日本学術振興会特別研究員(PD)を経て、2010年10月より九州大学大学院比較社会文化研究院専任講師。博士(京都大学、地域研究)。

主要著書 『現代イラクのイスラーム主義運動—革命運動から政権党への軌跡』(有斐閣、2011年)、「反体制勢力に対する外部アクターの影響—イラク・イスラーム主義反体制派の戦後政策対立を事例に」(『国際政治』、166号、2011年)、“Sectarianism Twisted: Changing Cleavages in the Elections of Post-war Iraq”(『Arab Studies Quarterly』、34-1、2012年)、『現代イラクを知るための60章』(酒井啓子・吉岡明子との共編著、明石書店、2013年)

山形 辰史(やまがた たつふみ)

1963年岩手県生まれ。1986年慶應義塾大学経済学部卒業、2000年米国・ロチェスター大学より博士号取得。Bangladesh Institute of Development Studies客員研究員(2000-2001)。2012年より、JETROアジア経済研究所国際交流・研修室長、開発スクール事務局長・教授。専門は、開発経済学、バングラデシュ経済、障害と開発。

主要著書 『開発経済学：貧困削減へのアプローチ』[共著者：黒崎卓](日本評論社、2003年)、「バングラデシュの障害当事者と障害者政策—Community Approaches to Handicap in Development (CAHD)の意義と課題—」(森壮也編『南アジアの障害当事者と障害者政策』日本貿易振興機構アジア経済研究所、2011年)145-165頁。

第17回応募作品の傾向と選考経緯

2012年4月から2013年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、合計45作品の推薦・応募があった。

本年度応募作品の対象地域は例年通りアジアが多く22点あり、中東4点、アフリカ4点、中南米3点であった。また単著33点、共編著12点であった。

応募作品数の増加に伴いこれまでより分野が多岐にわたり、開発一般、経済、工業、農業、政治、社会開発、ビジネス/BOP・CSRの各分野から各4～5点であった。防災/難民は2点の応募があり、法律、保健・医療、居住は各1点であった。FASID国際開発研究センターで予備審査を行い、受賞作品に加えて下記3点が最終審査対象となった。(書名五十音順)

松尾 弘 著 『開発法学の基礎理論 -良い統治のための法律学』 勁草書房

清水 展 著 『草の根グローバリゼーション -世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』 京都大学学術出版会

吉野 馨子 著 『屋敷地林と在地の知 -バングラデシュ農村の暮らしと女性』 京都大学学術出版会

審査過程において審査委員から出された意見はおおよそ以下のとおりである。

松尾弘氏の作品につき、「法と開発」について欧米では多くの研究・文献があるが、日本人専門家として途上国で法制度整備支援に携わった著者が、自らの視座で整理したことは意義がある。法学の専門家側から、政府のあり方、国家統治、地球統治について論じた研究は少なく、歓迎する。

清水展氏の作品は、「遠隔地の環境主義」「グローバル」がもつ意味を具体的な事例を通じて、分かりやすく示している。国際協力が果しうる可能性や役割への示唆もあり、有用と思われる。ジャーナリスティックな視点としては、十分な価値がある。

吉野馨子氏の作品は、バングラデシュ農村の生活、とりわけ屋敷地林の植物に関して綿密な調査と克明な分析がなされている力作である。「見えない価値を可視化する」という視点が貫かれており「在地の知」に基づき資源を活用していく可能性を提起した点は、意義深い。

審査委員会 審査委員長 杉下 恒夫 (FASID理事長)

審査委員 荒木 光弥 (株式会社国際開発ジャーナル社代表取締役)

絵所 秀紀 (法政大学教授) 大来 洋一 (政策研究大学院大学名誉教授)

大野 泉 (政策研究大学院大学教授) 岡田 尚美 (FASID専務理事)

FASIDでは、国際開発分野の研究奨励と促進に資するため、2014年度も「国際開発研究大来賞」を実施いたします。国際開発に資する良書のご推薦を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。募集については2014年度前半にFASIDウェブサイトにてご案内いたします。

FASiD

一般財団法人 国際開発機構 国際開発研究センター (服部/房前)

Foundation for Advanced Studies on International Development

〒106-0041 東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6F

TEL : 03-6809-1997 FAX : 03-6809-1387 E-mail:okita@fasid.or.jp http://www.fasid.or.jp